

平成29年8月28日

平成29年度 前期授業改善の結果及び後期授業改善の取組について

学校名 墨田区立立花吾嬬の森小学校  
校長 横山 公一

1 本校の学力向上に関する課題

(1) 平成29年度区学習状況調査結果から明らかとなった課題

① 【分析・考察】  
国語はほぼ全項目で目標値を上回ることができた。(第4学年の「話す力・聞く力」の観点を除く)これは、国語での少人数指導や放課後補習、家庭学習での取組の効果が表れてきたものと思われる。また、長期休業後の全校漢字計算テストの取組の成果として、「言語についての知識・理解・技能」の観点において、ほとんどの学年が10ポイント近く上回っている。  
算数は低学年から中学年にかけての、定着が高いが、高学年の結果が低迷している。

昨年度比(同一集団を、一年前と比較した成績の増減)  
現2年・・・国語(昨年の2年生よりPは高い) 算数(昨年の2年生よりPはやや低い)  
現3年・・・国語(全観点で↑) 算数(全項目昨年とほぼ同値)  
現4年・・・国語(3観点で↑話す聞くで↓言語はほぼ同) 算数(全観点で↑) 社会(全観点で都平均Pより大幅に高い) 理科(全観点都平均Pと同値)  
現5年・・・国語(同値2、↑1、↓1観点) 算数(全観点で平均値を下回り、さらに低まっている) 社会(全観点で↑) 理科(ほぼ同値)  
現6年・・・国語(ほぼ同値やや↑) 算数(ほぼ同値やや↓) 社会(全体的に↓) 理科(全体的に↓)

(2) 区学習状況調査結果以外(普段の授業の様子等)から明らかとなった課題

◆課題  
第5学年は、理科の「科学的な思考・表現」において、7ポイント以上下回った授業のすすめ方において、「問題解決方学習」に取り組むとともに、ノートなどの記述指導において「実験方法」「予想」「結果」「考察」などの観点を押さえ筋道を立てて考える習慣を身に付けることを充実させる。  
第6学年の算数においては、全観点で目標値を下回った。習熟度別指導や放課後補習などの効果が、学力下位層に対しては一定の効果があつたものの、全体的な底上げまでには至らなかった。

2 平成29年度【前期】授業改善の取組(方策)の実施状況(どの方策がどの程度実施できたか)

<b>学力D層・E層の児童・生徒数を昨年度より減少するための取組</b>
○少人数習熟度別指導および個別支援の充実 →昨年度(母集団同)比で算数においては成果が現れていない。国語科では減少している。
<b>区の共通課題①「読む能力」「書く能力」「言語の知識・理解」を育成するための取組</b>
○暗唱・読書・マイ辞書などの多様な言語活動の工夫 →計画通り全学年で実施している。
<b>区の共通課題②「思考力・判断力」を育成するための取組</b>
○問題解決型による、全学年での統一した算数指導 →どの児童にも自分で考える(既習事項を使って)時間を保証している。このまま継続する。
<b>区の共通課題③学習意欲を高める取組、若しくは教育家庭外の学習時間の増加の取組</b>
○補習授業の充実や宿題 →毎週の補習授業(すみだじゅく)に担任がより一層かかわるように、形態を変えた。

3 平成29年度後期における学力向上に関する具体的な取組

(1) 学校全体で組織的に取り組んでいくこと

- ① 算数科 問題解決型の学習の推進と問題処理能力の向上  
「疑問をもつ」「考える」という個人の活動をしっかり時間を確保したうえで、グループや全体での協動的な意見交換の学習を通じて、「表現力」や「できる」という意欲を高める。  
全教員の課題として、児童相互の言語を通じた活動を重点化するとともに、適応問題の時間を確保する。講師や支援員との情報交換、すみだ塾や生き生き事業との連携をさらに強化し、児童へ指導の方向性を明らかにした指導を展開する。  
また、本校独自の繰り返し教材を作成し全学年で取り組むことで問題をより多く解き、学力の定着を向上させる。
- ② 授業規律・学校での学ぶ基本の態勢づくり  
話す・聞く活動の充実、本校児童の良さをさらに伸ばすうえで必要な活動であるため、学年の実態に応じた話し方や聞き方を「話し方名人・聞き方名人」などとして徹底し、思考力・判断力・表現力の向上に努める。  
学習ノートの指導を徹底し、家庭学習や次時の振り返りに役立たせる。  
Eライブラリーの積極的な活用について、児童、保護者や地域に紹介し奨励する。
- ③ 読む活動、書く活動、暗唱活動の充実・・・短い時間の活動に長期間継続して取り組むことで、各力の向上を図る。

(2) 特定の学年や特定の教科において取り組んでいくこと(学年や教科を明記する)

- ①全学年の教科指導において、ICT機器等を活用した効率的な教材提示を行い、知識理解の定着や意欲の向上、めあての達成にむけた素地を作る。ノート指導を丁寧に行い、机間巡視中での指導はもちろん、週に最低一度はノートを回収して確認するとともに評価を行い、児童にとって活動の有意義化と学習に対する意識の向上を図る。  
家庭や保育施設へ協力を仰ぎ、児童が家庭学習で必ずノートに目を通し、学習内容を再度確認するような学習習慣をつけさせる。授業中も、既習事項の確認のため積極的に活用できるような展開を心がける。
- ②3年生以上において、社会科・理科において授業の冒頭で、振り返りや知識・理解面を重点化した時間を設け、基礎知識の定着を図る。ICT機器を有効に活用し、視覚的に理解しやすい教材提示を毎時間行う。理科では、授業の流れを一本化する。「課題把握」「予想」「実験方法」「結果」「まとめ」とし、器具の使用法や名称などをノートに記載させ、これを活用し、定着するよう取り組む。  
フラッシュカードの活用や教材開発などを工夫すると同時に、次年度でも使える学習材の共有化を図る。

成果指標(成果があつたかどうかをどのように判断するか)	具体的な目標(できるだけ数値化する)
<ul style="list-style-type: none"> <li>・学力向上プロジェクトチームの定例会議にて、各学年の取り組み状況と児童の変容を報告しあい、共有するとともにさらなる活性化を図るための重点ポイントを明らかにし、職員会にて提案する。</li> <li>・授業観察の回数を増やし、児童の発言の様子や学習の進み具合を、観察カードにて担当に伝える。</li> <li>・週案上に、取り組みを計画させるとともに、実施状況を記載する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・プロジェクトは月に一度行う。</li> <li>・2週に1度は必ず、職員会議にて取り上げ進捗状況を全体で確認する。</li> <li>・授業観察は、現在週に2度～3度程度を維持し、観察カードは週に最低一度は伝えるようにする。</li> <li>・週案簿上にて、担当との情報交換を毎週行う。</li> </ul>

4 平成30年度の区学習状況調査の目標(D・E層の割合をどれだけにするか)

(新3年53人) 国語・・・8→4人 算数・・・12人→6人  
(新4年68人) 国語・・・12人→6人 算数・・・12人→6人  
(新5年62人) 国語・・・10人→5人 社会・・・12人→6人 算数・・・12人→6人 理科・・・13人→6人  
(新6年47人) 国語・・・16人→8人 社会・・・22→11人 算数・・・17人→8人 理科・・・30人→15人